

世界宗教者倫理会議の開催に向つて

——バチカン宗教会議（ネミ会議）の評価とネミ以後——

明治神宮権宮司 副 島 廣 之

世界の各地に紛争が頻発し、「東西」、「南北」などの諸問題にますます緊迫の度を深めている最近だが、こういつた現実の中で、世界平和の実現に向つて、宗教者が一体何をするべきか、何をなし得るか、という自省と実践を目的とした動きを、世界的レベルの諸宗教間で見せつつあるのは注目していい。

我が国は、日本民族の特徴ともいえる寛容性のゆえに、よかれあしかれ宗教の博物館とも評されるのだが、それだけに諸宗教間の相互理解と協力といった問題には適役といえ、明年秋、東京で開催される初めての「世界宗教者倫理会議」は、極めて画期的といえよう。

そこで、このことに直接携わっておられる明治神宮の権宮司、副島廣之氏にお願いして、宗教界のこの辺の消息について書いて頂いた。

—編集部—

昭和五十三年七月二十四日から二十六日まで、バチカンにおいて日本の神仏代表とバチカン代表による宗教会議（ローマの郊外ネミ湖畔で行なわれたので「ネミ会議」と名づけられた）が開かれた。日本側の代表は徳川宗敬（神社本庁統理）、篠田康雄（同総長）、副島廣之（明治神宮権宮司）、葉上照澄（比叡山延暦寺長）、壬生台舜（浅草

寺執事長、長沼基之（立正佼成会理事長）の各氏以下十五名で、又バチカン側も、諸宗教連絡聖省セルジオ・ピネドリー枢機卿をはじめ、ピエトロ・ロツサーノ次官、尻枝次官補、無神論聖省ピンチエンツォ・ミアノ次官、正義と平和委員会ベルナイル・ラランド事務次官のほか数名の専門家と、他にオブザーバーとしてローマ駐在ユダヤ教会議代表フリッツ・ペーカー博士が出席、さらに日本カトリック諸宗教連絡委員会より田中健一委員長、日本カトリック司教協議会松村肯和事務局長が参加した。

一、会議のテーマと発題

会議のテーマは、(一)世界平和に寄与する実践方法、(二)宗教者間の一致協力、(三)無神論者との対話、(四)世界の宗教倫理の確立をめざす世界的精神運動の四件であり、いずれも世界平和に深い関連をもつ問題であった。

会議はバチカン側よりピネドリー枢機卿、日本側篠田団長の挨拶によって始められ、日本側は神道、仏教の考え方の特色並びに各テーマにわたり、神道の立場から副島、仏教の立場から壬生台舜氏、バチカン側はテーマ別に、(一)についてはラランド事務次官（正義と平和委）、(二)については尻枝次官補（諸宗教聖省）、(三)についてはミアノ次官（無神論聖省）、(四)についてはロツサーノ次官（諸宗教聖省）が基調講演をおこなった。

これらの基調講演をもとに質疑応答と意見の交換が行なわれたが、その討議の内容は、既に中外日報、日本を守る研究情報、国際平和研究レポート等はその概要を記述した。しかしなお重複をいとわず、私なりに、会議の特徴の二、三を挙げてその印象を語りたいと思う。

一、ネミ會議の特徴 (1) 自然と人間の相関関係

會議の特徴の一つは、平和問題の根底としての「自然と人間の相関関係」が話題となったことである。會議の開会にあたってピネドリ―樞機卿は、霧島神宮社前の石碑に刻まれた次の言葉に深い感銘を受けたことを語った。

神靈がこの地に降臨し、天地が生れ位時が定まった。煌々たる慈しみの靈は、万代に至るまで世界を護る。この詩碑は徳富蘇峰先生の作で、ピネドリ―卿はその大要についての説明を受けたのであろう。樞機卿はさらに言葉をすすめて、「何とすばらしい言葉であらう。そこに私は、キリスト教と日本の諸宗教の接点を見た。神は決して人間から離れた別ものではない。天は地から距っているものでもない。自然は神に罰せられ厭われた被造物ではない……」と述べた。

こうした神と人、神と自然の親近感については、更にラランド次官が「われわれは環境をよくするだけでなく、神の創造物である動・植・鉱物を尊敬する念を持ち……そして人間は神からその知性と労働によって、自然を完成と豊饒に導く使命をもつ」との見解を述べたのであるが、私はこうしたカトリックの姿勢に新鮮な驚きを覚えざるを得なかった。日本側からも自然と人間の調和と共栄が強調されたことは云うまでもない。

真の平和は人間対人間の間においてのみでなく、こうした自然対人間の関係の中での親近感、乃至は慈しみの心、あわれみの心などが根底となり、それが環境、資源、食糧などの諸問題にも作用して、大きな底辺を構成することを忘れてはならない。

一、ネミ会議の特徴 (2) 人間対人間、国家対国家の平和

さて直接的な人間と人間、国家と国家の間における平和の問題であるが、今日すべての人類の切なる願いであるべき平和を沮害する要件は、第一に国家のエゴによる帝国主義的侵略であり、第二に体制を異にする国家間のイデオロギー抗争、第三に宗教信条を背景とする宗教的紛争である。

(1) 会議の冒頭での挨拶の中でピネドリイ卿は、「宗教の政治の領域における可能性には限界があるが、宗教者の一致協力の努力によって、人間同志、国家同志のよりよき理解に貢献しうる。戦争によっては何一つ得るところがなく、逆にすべてを失うだけだ」と述べ、又ラランド次官は、「武装解除や軍縮は兵器という客体でなく、兵器を造りそれを用いる人間の主体の側にある。結局は良心の問題であり、ここに宗教者の課題がある」とし、すべての国家国民の保護と発展を保証するに足る国際機関をつくり、それを支持することが今日の世界共同体に課せられた使命であると述べた。このことは現在日本で進められつつある世界連邦運動と同宗教委員会の活動に相通じるものがあり、結局は現在の国連より更に強力な国際的調整機構の出現をはかることが必要とされるのではあるまいか。

(2) 第二に体制を異にする国家間の紛争は、民族自決などさまざまな様相とからみ合って、現実には東西問題として世界の随所に発火し、又くすぶりつづけているのであるが、ミアノ次官は無神論聖省の立場から、マルキストに対し階級のない社会をめざす彼等の信念に一応の理解を示しつつも、彼等はいわば人間的次元にとどまり、宗教的信仰をもたぬ「誤れる人、迷える人」であり、これと対話し教化することは必要ではあるが、パチ

カンにはマルキシズムそのものに対しては一寸の妥協もなく反対であるとの見解を明らかにした。

一方又、篠田団長が開会挨拶の中で指摘したように、平和に対する今日の現実はきわめて冷厳苛酷であり、相反するイデオロギーの対立抗争、体制を異にする国々の不信感、そして武力を背景とした政治力学を前にして、宗教者は今、これら力の論理に対し、いかに立ち向かうかが真剣に問い直されなければ、平和運動は単なる空転の繰り返しに終らざるを得ないだろう。

(3) 第三に宗教的信条を基とする紛争は、遺憾ながら現在なおその跡をたつたとは云いきれず、このことは本来人類の平和と福祉を希う宗教者として、全く恥ずべき現象といわねばならない。これら宗教的な紛争の解決の前提として、私は一神教と多神教（或いは汎神論）の神觀念の相互理解と容認の必要性を述べた。すべての宗教が仰ぐ神は本来一つであり、地理的な風土や文化的条件を異にする人間の神への認識の仕方、或いは受けとめようによって、これをカミといい、エホバといいアルラーという。いかにも独断的な言い方のようにあるが、一つの天地を創造した別々の神の存在こそ大きな矛盾であり、こうした万教同根の視野に立ちえぬ一部の偏狭な一神教的信条によって、人類は忌まわしい宗教戦争の悪夢を見てきたものではなかったか。真の宗教協力と宗教の相互容認は、こうしたかたくな己れの神のみを固守する限り、その成果を挙げることは困難である。

一、ネミ会議の特徴 (3) 科学文明の弊害と精神の復権

今度の会議のもう一つの特徴は、科学文明の弊害や物質万能主義への反省から、精神の復権、特に少欲知足

の心の必要性とエゴイズムの排除が、日本、パチカン双方から強調されたことである。近代科学の発達是一直ちに物質文明として連動し、価値観の錯倒、利己主義による協調と連帯感の喪失、無責任、無関心層による社会秩序の混乱、大量生産と大量消費による環境汚染と人間のあくなき欲望の追求など、多くの現代病の兆候を生み、このままでは遠からず地球人類の自滅を招きかねない状況にある。今日の大量消費社会にあっては儉約、節制の徳によって人類を唯物主義の道徳的、精神的危機から救うことが緊急事であり、結局は少欲知足の精神を必要とするということで双方の意見は全く一致した。ロッサーノ次官が、人間の最高の理想は秩序と平和の維持であり、心から利己主義を、生活から唯物主義を去れと論じたことも、すべての参加者が心から共感するところであった。

一、ネミ会議の評価とネミ以後 —— 世界宗教者倫理会議の開催に向けて ——

(1) 会議は四つのテーマについて共同コミュニケを発表して三日間の幕を閉じたが、いくつかの重要な提案がコミュニケの中に採択されたことは大きな成功であった。特に世界の宗教倫理確立に関する日本側の提案が、「諸宗教の倫理感と実践に関する共同研究」や、「自然と人間の相関価値を議題とする宗教者による国際的な倫理会議の開催」が合意されたことは、きわめて意義深いものであった。

(2) 昭和五十四年一月二十四日、明治神宮に徳川宗敬（神社本庁統理）、朝比奈宗源（臨済宗円覚寺派管長）、伊達巽（明治神宮々司）ほか神仏基督諸教の代表数十名が参集して新春懇談会が催され、ネミ会議の共同コミュニケにもとづく世界宗教者倫理会議の開催について協議懇談した。

その結果、(一)昭和五十五年十月下旬―十一月月上旬同会議を東京で開催する(日本青年館国際会議場を予定)、(二)会議参加者は今後バチカン側とも協議するが、予想される各国教団としては、カトリック、ギリシャ正教、カントベリー教会、プロテスタント各派、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、神道、仏教その他諸教の首脳の参加を要請する、(三)準備委員として委員長篠田康雄(熱田神宮々司・神社本庁総長・日宗連理事長)、委員田中文清(世界連邦日本宗教委員会委員長・石清水八幡宮々司)、副島廣之(明治神宮権宮司)、町田宗夫(曹洞宗事務総長・全日仏理事長)、後藤純一(臨濟宗妙心寺派事務総長)、壬生台舜(浅草寺執事長)、田中健一(カトリック京都司教区司教)、松村菅和(日本キリスト教連合会委員長)、亀谷壯司(日本福音協会連合会副理事長)、広瀬静水(人類愛善会々長)、長沼基之(立正佼成会理事長)、坂田安儀(観教管長)、斎藤積平(日本イスラム教代表)、田中忠雄(生長の家理事)、事務局長杉谷義純(天台宗円珠院住職)の諸師を選出した。(その後準備委員会は毎月一回開催され、趣意書の起草その他諸準備が開始されつつある。)

(3) 去る昭和五十二年五月、イスラム教最高審議会事務総長トウフイック・オーエイダ氏の招きにより、葉上照澄師を団長とする宗教ミッションに私も参加してエジプトを訪問、サダト大統領はじめ政府高官のほか、イスラム教学の最高学府であるアズハル大学(カイロ)総長アブデルハレム・モハメット博士等と会談した。つづいて昨五十三年三月、東京の明治記念館において世界宗教代表者会議が開催され、バチカン代表、ピネドリ―樞機卿、イスラム教代表カリック博士(駐日エジプト大使)をはじめ、日本宗教連盟、世界連邦日本宗教委員会、世界宗教者平和会議日本委員会の代表が講演したのち、世界平和に対する宗教の役割について意見交換を行なった。昨夏のバチカン訪問は、こうした過程をふまえて行なわれたもので、このような諸宗教の接触と相互理

解、さらに宗教協力によって、宗教そのものの教義は別におくとしても、人間の靈性回復の必要性が今日いかに大であるかは共通の認識とされるところであり、更にこれを発展せしめ、世界の諸宗教の首脳が一堂に会し、人間精神の復権と倫理の高揚について語らんとするのが世界宗教者倫理会議の目指すところであろう。しかしながらこの会議の成否は、めまぐるしい国際状況の推移の中でなお予断を許さぬものがあり、今後関係者の協力と真剣な推進への努力が期待されるところである。

【参 考】

ネミ会議共同コミュニケ —— 全文 ——

日本宗教特別使節団並びに日本カトリック連絡委員会は、ローマ教皇庁代表とローマ（ネミ湖畔）並びにカストル・ガンドルフに、「平和の人」「対話の人」「宗教の人」として相集い、昭和五十三年（一九七八）七月二十四、二十五、二十六日の三日間にわたり、四つのテーマに基づいて会議を開催した。

この会議の目的は、現代世界が直面している深刻な危機的状況を憂慮し、宗教者の立場から社会的要請に対応するため、卒直な意見の交換を行ない、真摯な協議を重ねた結果、次の事項に関し合意に達した。

一、テーマ 世界平和に寄与する実践的方法

すべての国民の人権と平和及び進歩を目的とする国際機構に、宗教者の立場から積極的に協力する。特に国連大学に平和の研究機関を設置することを要望する。

二、テーマ 宗教者間の一致協力

宗教者間の相互理解を推進するため、まずそれぞれの宗教者が自らの宗教をいかに実践しているかを互いに理解し合い、また次代を荷負う青年宗教者の対話を積極的におすすめよう努力する。

(1) 宗教に関する学究者レベルの交換（教授、助教授、講師、大学院生）

(2) 宗教生活の体験レベルの交換

(3) 宗教学の姉妹関係樹立の斡旋

(4) 現在日本で推進されている青年宗教会議の国際的規模での育成

三、テーマ 無神論者との対話

われわれ宗教者は、無神論及びマルキシズムとは根本的に相容れるものではない。特にその暴力と欺瞞性を強く排除し、自らの反省を通じて、信仰による社会正義と信頼をかちとるよう最善の努力をしなければならぬ。

しかし無神論、マルキシズムが容認される土壌を研究するとともに、人権及び社会問題について共産主義者と対話の機会をもつことの可能性を検討する。

四、テーマ 世界の宗教倫理の確立をめざす世界的精神運動

われわれは諸宗教のもつ倫理性こそ共通の実践的基盤であることを認識し、次の事項の早期実現に努力する。

(1) 諸宗教の倫理観と実践に関する共同研究

(2) 「自然と人間の相関価値」を議題とする宗教者による国際的な倫理会議の開催

以上

〔附記〕 ネミ会議の開催にあたり、円覚寺管長朝比奈宗源老師よりローマ教皇パウロ六世に対する書翰が寄託された。要旨は次の通り。

(一) 唯物主義者、特に共産主義者の誤りの第一は、人間の本能的欲望としてのエゴイズムの囚となつてゐる事である。古来の宗教者はこの心の敵にうち勝つて人間の靈性を発見し、人間を迷いの牢獄から救出する道を開き、争いのない家庭、社会、国家、世界の普遍的な倫理の基礎を確立した。しかるに現代の各国指導者には、人類全体の運命を自己の責任として、その不幸を悲しむ精神に欠けている。

(二) 日本の天皇は終戦直後、マッカーサー元帥を訪問され、一身を捨てて国民を救うことを申し出られた。これがマッカーサーを感動させ、日本保全の道が立つた。この崇高無比な伝統的な天皇のご存在とご人格―皇道の精神によって日本は救われたが、この日本国民の倥傯は決して日本国民だけのものであつてはならない。人類救済という宗教者の悲願達成のために、共々に一大奮起を賜らんことを切願する。